

客館－太宰府の豊かなもてなしを強調する新たな発見

7世紀から12世紀の間、太宰府は西日本の首都であり、国際外交の非常に重要な中心地でした。外国の高官や随行人は博多湾に船で入り、太宰府に護送され、その後京都や奈良の都に向かいました。

広大な行政上の複合施設の中心にある宮殿のような官公庁は十分に文書と知られていましたが、考古学者はごく最近になって、来賓客用に使われていた客館を発見しました。

発掘調査によって住居が明らかになり、この時代には最高のホスピタリティーの形である、おもてなしという日本的な概念が広まっていたようです。日本産の漆塗りの器、中国の陶器や韓国風の金属製の器や漆塗りの器など、高品質な食器のかけらも見つかっています。そのような道具を使うことは、来賓が非常に高い尊敬を受けていたことを意味します。

古代太宰府では、その都市の碁盤目状の構成から、五行思想の役割を示唆する南向きの行政の建築物まで、中国の影響を見ることができます。歴史学者は、来賓が客館に催事に訪れていたときに、東側から西に面して座ったであろうことを発見しました。五行思想の原則では、東側は伝統的にホストのために確保されており、来賓はそこでの滞在中に客館を本拠地として扱っていたことがうかがえます。現在の大使館のような存在です。

太宰府での発掘は数十年にわたって続いており、現在も進行中です。太宰府展示館では、太宰府の豊かな歴史について詳しく知ることができます。